

アーカイブ構築における創造的思考とアルチ寺仏教壁画の視覚表現研究 ー井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究ー

◎正垣雅子（奈良芸術短期大学ⁱ）、山下晃平、加須屋明子、加須屋誠
（京都市立芸術大学）、岡田真輝（京都市立芸術大学芸術資源研究センター）

1.はじめに - 研究の概要 -

京都市立芸術大学芸術資源研究センター（以下、芸資研）では、2017年4月より「井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究」プロジェクトを立ち上げ、写真家の井上隆雄（1940-2016）が残した膨大な写真資料を対象として、資料の保存・分類・調査・利活用というアーカイブ実践を行いながら、作家・作品研究のもう一つの視点として、そのような資料調査を通じた美術・文化史への新たな方法論の構築について研究している。ⁱⁱ 本研究では 井上隆雄写真資料ⁱⁱⁱ の内のインド・ラダック地方の仏教壁画に関するものを対象として、グラフィック的観点での整理分類とその活用を目的としたアーカイブ構築を目指している。これまでの活動から、井上隆雄資料についての考察とアーカイブ構築についての創造的思考と実践を報告する。

2.研究方法 - 写真資料のアーカイブ実践と分析 -

研究対象としての素材は、ブローニーや35mmマウント、スリーブ類の多数のポジフィルム、そして井上隆雄の取材ノート、メモ類、地図や現地で購入した関連資料類がある。本研究は、アーカイブ研究、仏教美術史、そして模写の研究者によって構成された少数による共同研究である。この組織構成は、潤沢な予算と設備、十分な動員で進行している研究とは言い難い。しかし、定期ミーティングを行い、資料に対する共通理解を深め、資料のアーカイブ構築と画像分析を同時並行で行っている。また本研究そのものの作業工程も記録することで、アーカイブ実践のアーカイブ化も進めている。作業工程の記録は、今後の研究方法の検証になりうると考えている。

資料の分類を行うためには、原秩序、すなわち井上隆雄の資料の分類状況を変更する必要がある。時には箱から箱への移動やスリーブの切り離しも必要となる。そのため、2019年度よりまずは現秩序の記録作業を行なった。その上で、ラダックにある15の寺院別にポジフィルムの分類を進めることとした。

井上隆雄の取材ノートを確認すると、調査寺院によって撮影や取材にかけられた時間や密度には差があると思われた。また、寺院にあるすべての堂宇の壁画撮影がなされたようではない。つまり、現地の状況に合わせた「写真家」井上隆雄の目によってフォーカスされた対象が撮影されたものと推察される。全体を概観すると、井上の関心事、それは井上が初めて体感した土地と文化に対しての新鮮な印象、驚き、また寺院壁画の美に対してカメラを構え、シャッターを切っていることが判明してきた。井上の壁画の撮影は仏教画像の情報収集ではなく、また、壁画表現の質で選別しているとも思えない。描かれている環境も含めて井上の関心、それを写真でどう伝えるかの試みであったように思う（図1-3）。しかし、スナップ写真の集積ではない。撮影した壁画には、すべてとは言えないが位置関係、寸法の記録が取材ノートに記され、井上自身の撮影対象に対する整理が撮影時から同時進行で進められたことは、この写真資料の特徴であろう（図4）。

今回のアーカイブが「グラフィック的観点」という軸を持つのは、このような本資料の特徴に即していると考えられる。何が被写体となったか、それが壁画表現であれば、何が表現された壁画か、という視点での分類のはじまりが、この資料の本質的な秩序の整理になると考察した。

分類の手がかりとしたのは、写真資料のフレームに記載されたメモ、取材ノート、井上隆雄著『チベット密教壁画』（1978年 駸々堂出版）また、現行のラダック関連の出版物であり、これらを参考に寺院の同定作業を行い、分類を進めた（表1）。壁画内容の分類については、基本的にはチベット仏教美術の画像に準じるが、現在の研究体制ではチベット後伝期仏教の尊像の詳細を同定することは困難であると考えたので、一見した視覚的特徴から導き得る大枠の把握ということにとどめ、項目立を行った（表2）。

最初に寺院ごとに写真資料を整理した。引き続き、代表者自身の調査経験があるアルチチョスコル寺院とサスポール石窟廃寺の壁画の分類と同定に取り組んだ。井上が撮影と同時に位置の記録も残したこ

とは、チベット仏教寺院の特徴の把握と連動している。チベット寺院は堂宇に役割があり、尊格が安座する方角も定められている。さらには僧侶の修行の段階、または巡礼者が男性か女性かによって立ち入りが制限される堂宇、空間も存在する。撮影された壁画が、どの堂宇に、どの方角に位置していたかという情報は重要である。デジタル化に伴うIDの付与は、空間配置の情報、すなわち東西南北^{iv}と階層、そして壁に対する図像の高低を判明する範囲で付与することとした。

現在のところ、ポジフィルムの撮影地の分類を終え、フィルム、取材ノートのデジタル化とIDの付与を進めている。アルチチョスコル寺院とサスポール寺院をはじめ、マンギユ寺院、バズゴー寺院、ツェモ寺および、ラダックの風景や町、人物の撮影画像のデジタル化を完了した。

表1 写真資料の撮影地の同定

寺院名	アルチ					ラマユル	サスポール
	三層堂1階	三層堂2階	大日堂	新堂	その他		第3窟
点数 (6×7mm)	81	34	83	74	26	112	91
点数 (35mm)	3	4	4	4	-	6	3

寺院名	マンギユ	バスゴー	ガオン	グル	スピトク	シャンカル	ツェモ
点数 (6×7mm)	36	173	75	85	147	59	52
点数 (35mm)	-	15	17	17	44	-	-

寺院名	スタクナ	シェー	ティクセ	ゴツァン	ヘミス	風景
点数 (6×7mm)	32	64	131	26	157	439
点数 (35mm)	2	7	7	1	74	125

表2 壁画内容の分類項目

分類	備考	分類	備考
1 如来	柔和尊の如来形のみ	6 曼荼羅	円あるいは方形で図示された仏の世界図
2 菩薩	柔和尊の菩薩形のみ	7 仏伝	物語性のある表現を含む
3 守護尊	本分類では、父母合一仏の表現のみ	8 供養者・俗人風俗	在家形の人物表現
4 天部・護法尊	本分類では忿怒尊・明王系の尊格、および男性・女性の忿怒尊も含む	9 文様	具象・幾何学の連続する文様
5 祖師・羅漢	僧形、修行者、成就者など	10 その他千体仏・全景	壁全体また空間全容を意識した撮影画像

3. 壁画表現に対する考察と模写の方向性について

2.の研究方法によって得た井上隆雄資料のブローニーサイズでの撮影画像は、デジタル化で等倍以上の詳細な画像を確認することができた。アーカイブ実践の活用を展開として行う模写について、手技の選択、表現の方向性について考察したいと思う。

代表者は、日本および東洋の古画の模写に取り組んできた。一言で「うつす」といっても、様々な考えと目的、技法と方向性があり、時代や要請に基づき、最善の方法を模索し模写は継続されてきた。^v 現代の模写の方向性の流れは、「同素材・同技法」が主流である。かつては原本の現在の状態を具にうつしとるという方向性の現状模写が行われていたが、近年の撮影、印刷技術の格段の進歩によって現状模写の必要性が低減したと言われている。模写が原本の表情の美をうつしとる絵画から、作画の材料、順序を探究する実践研究として確立したとも言えよう。復元模写では、多角的な考察と高い技量に基づいた手技による実践と総合的な研究成果を得てきた。しかし一方で、「同素材・同技法」が、現在の原本から収集する情報と分析の集約から想定されること、使用する画材・道具は現在の物質であるという事実は、厳密に言うとは原本の当初をすべて詳にしたものとは言い切れない。制作当時の作画状況、色材の色調、人の手技、絵師の感性と表現の妙は原本のみが秘するものであろう。

本資料のデータは画像の明瞭さに秀でたものである。グラフィック的観点での表現技法研究は可能で、作画の材料・順序の探究の根拠は模写を行う代表者の現地調査の経験から補足することで、色調や壁画表現の風韻の置換が可能と判断した。また、科学的調査が未実施であることから、それ以上の作画の材料、順序の探究は難しい。今回は、46年前の壁画の状況とその表現の風韻を絵画の美としてうつしとる

現状模写を行うこととする。

4.共同研究による創造的アーカイブの形成

ここでまず、上記の本プロジェクトの研究方法を踏まえた上で、本アーカイブが一般的な該当作家に対する資料アーカイブとは質が異なっているという点を押さえておきたい。つまり本研究においては、写真家・井上隆雄アーカイブを指すのではなく、井上隆雄が残したインド・ラダック関連資料を将来的な研究資料へと利活用するためのアーカイブ実践である。^{vi} この場合、資料群は該当作家の記録資料から研究対象としての資料へと置換されている。この資料群の意義、位置付けには留意する必要がある。さて、アーカイブ構築における担当者の恣意性の問題はしばしば指摘されるが、このような形で残された資料を利活用可能なものとしてアーカイブ化する場合には、アーカイブに求められる網羅性と客観性だけでなく、担当する研究者による対象資料の性質の理解や分析を踏まえることで、より将来的な研究に有効な資料を生むのではないか。実際に本研究では、担当研究者の意見交換を通して、撮影者独自の感覚に基づいた視覚的表現こそが本資料の特質であることに基軸を設けた。そして、大別として寺院毎の分類、次は壁画の視覚的表現に基づいた分類、さらには配置という客観的事実をデータに付与するアーカイブ構築の形成となった。

アーカイブ実践の方法論として、多くの作業者を集め効率的にデータベース化を進めることは、短期間で一定の集計が完成する事例にその成果を認める風潮はある。しかし、少数による創造的な思考を伴ったアーカイブ実践もまた有効ではないだろうか。当然ながら、多くの時間が必要であり一人の作業量は増す。しかしながら後者の場合、構築されたアーカイブが、同時に利活用可能な研究用視覚資料へと展開することが可能である。

このようにアーカイブ実践が、直接的に研究者が集う場となっていること。その結果として生み出される資料を創造的アーカイブと位置づけた場合、これもまたパブリックな資料の集積としての「コレクション」とは異なる機能、アーカイブの意義として捉えられるのではないか。すなわち、アーカイブは網羅性や客観性が重視される一方で、担当者による創造性がよりその価値を高める場合もあるということ。そして、アーカイブは有機的な生き物のように変容を続ける可能性もあるということである。ただし次の点は極めて重要な要点として指摘しておきたい。その研究者による創造的思考は、研究者自身の個人的な関心ではなく、あくまでも対象への寄り添い、すなわち写真家・井上隆雄の軌跡を読み解くという行為によって生じた創造性ということである。この客観性と創造性という二律背反的な性質が同時形成される環境が、創造的アーカイブには重要である。同時に本実践に関わる人の視覚経験の深化が当人の実感に生じたことも興味深い。つまり、資料に対して未経験であったとしても、総合的にアーカイブ構築に関わり、時間をかけた調査によって、対象への親近感が生まれ、気づきや学びが生じている。作業者が機械的に資料の抽出や分類に取り組むと、分類上の単純ミスも生じやすいだろうし、建設的な経験にはならないであろう。調査員が成長することは、データベース作業や分類方法へとフィードバックされている。

本研究においては実際に、その形成されたデータベースとデジタル画像によって、井上隆雄自身が関心をもった壁画表現を原寸大で観察することができ、アルチチョコスル仏像の視覚表現に関して、これまで確認することが困難だった壁画表現をデジタル画像から把握することができた。本研究では模写を通じた研究を行うが、このような試みはアーカイブの利活用という事例となり得る。

5.おわりに - アーカイブ構築における創造的思考 -

アーカイブとしての網羅性、客観性を重視しつつも、当事者（写真家）以外の視点の介入という資料群への新たなアプローチによって、写真家が残した記録資料すなわち視覚表現が注視された本資料に適したアーカイブ構築の可能性が見えてきた。アーカイブとしての網羅性・客観性は重要である。しかしながら目的意識を共有した少数での共同研究を伴ったアーカイブ実践は、そのアーカイブの「個性」を創り上げることが可能となる。そして都度、知が集うことにより、構成員もまた成長し、そのアーカイブ自体も成長・進化する。アーカイブ実践にはそのような担当者の恣意性ではない「創造性」というもう一つの要点もまたあるのではないか。アーカイブとしての客観性と対象資料の性質。それを担当者がハイブリット的に再構築する、すなわち創造的なアーカイブを形成すること、このような「アーカイブにおける創造的思考」が共同研究者間で生成された場合、単なる作業に陥らない資料研究の学術的環境形成が可能となると考える。

謝辞：本研究は「DNP文化振興財団 グラフィック文化に関する学術振興助成」（2018年）の支援を受けて実施されました。本研究にご協力いただきました方々に謝意を表します。

- i 2020年4月より京都市立芸術大学所属。
- ii 京都市立芸術大学芸術資源研究センターは、芸術大学として「創造性」をキーワードに掲げつつ、芸術作品や各種資料などを「芸術資源」として包括的に捉え直し、記録の保存・活用を意味するアーカイブの手法を取り入れ、新たな芸術創造を生み出すため、2014年4月に京都市立芸術大学内に発足した調査・研究機関である。
- iii 「インド ラダック地方アルチョスコル寺三層堂壁画“般若波羅蜜仏母”の表現について-井上隆雄写真資料のアーカイブ実践研究の活用の可能性-（第41回文化財保存修復学会）。
- iv 通常、仏教寺院は、右繞といい時計回りに巡礼することが多い。またチベットの村は南に開けた山の斜面や谷間に位置することが一般的で南側に入り口を設けられることが多い。壁面の方向を右、左という表記では巡礼者視点か本尊視点か混同する可能性があるため、西、北、東、南と表記するIDを付与した。
- v 拙稿「模写における思考と表現」平成28年度奈良芸術短期大学研究紀要。
- vi 当然ながら井上隆雄が残した全資料の目録作成は行なっているが、本研究とはまた別の取り組みとなる。特定の作家のアーカイブ事例としては、例えば、武蔵野美術大学 美術館・図書館の大辻清司フォトアーカイブや、慶應義塾大学アート・センターでの瀧口修造アーカイブがある。



図1. アルチョスコル寺院三層堂二階の入口の様子



図2. アルチョスコル寺院新堂内部の様子



図3. アルチョスコル寺院三層堂2階の空隙から一階西側観音菩薩塑像の足元を撮影。

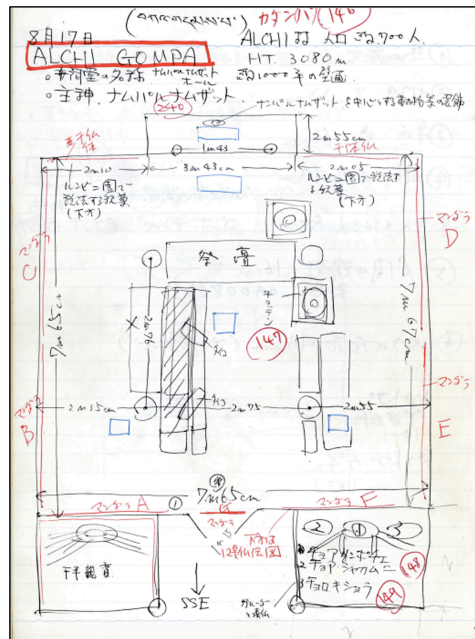


図4. 井上隆雄の取材ノート（一部）
細かな採寸情報も記録されている。